

名古屋市立大学 SDGs活動レポート (2021年度版)

9

産業と技術革新の
基盤をつくろう



教養科目「社会学C」 & 「地域連携参加型学習」の合同 講演会開催！



2021年11月13日（土）午後1時半から、名古屋市立大学桜山キャンパスさくら講堂で講演会を開催しました。教養科目である「社会学C」と「地域連携参加型学習」という授業の一貫で日本環境設計株式会社取締役会長、岩元美智彦氏をお招きして、ご講演いただきました。

両授業において扱っているESD（Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育）は、持続可能な社会づくりを担う人を育てる教育活動として、2005年よりユネスコを中心に普及・促進されてきました。現在では、SDGs（Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標）を達成するための教育活動のひとつとして捉えられています。SDGsに取り組むにあたり、持続可能な開発を構成する経済開発、環境保全および社会的公正の均衡はときに難しさをともない、不可能とも思われることも少なくありません。

今回お話してくださった岩元さんはこうした状況に「あそび心」をもって取り組まれてきました。映画「Back to the Future」に出てくる「ごみで走るデロリアン」からの着想で、「ごみを資源に」する技術と仕組みを開発しました。誰もが参加できる機会をつかって、生活者である一人ひとりが「ごみを資源に」する習慣を身につけること、それを文化にしていこうと試みられています。

岩元さんのお話の後で、岩元さんを囲んで座談会形式で受講生からの質問をもとに、持続可能な社会づくりに関わるこのワクワク感を共有する時間を持ちました。気候変動に関する諸問題によって、未来に希望を見出せず、「気候不安症」をいだく若者も少なくありません。岩元さんの話からは、そうした不安を払拭するような確かさとともに、あそび心をもって取り組むゆかしさを感じることができました。

【担当教員】

- ・「社会学C」：安藤理恵（高等教育院 名古屋市教育委員会連携推進特任教授）
- ・「地域連携参加型学習」：安藤理恵 & 曾我幸代（人間文化研究科准教授）

【出席した学生からのコメント】

- ・映画からの着想で世界を変える技術を生み出せること、その実行力に感動した。
- ・行動することを諦めない強さを持っていて、とにかくカッコいい。自分も見習いたい。
- ・岩元さんのことをもっと知りたくなっただけでなく、積極的に知識を増やしたい、学びたいと純粋に思った。これからの大学時代を有意義に過ごしたい。自分にも何かできるはず。
- ・自分事にするこの大切さを実感した。「正しい」を「楽しい」にしていけば、世界が変わる。
- ・「世界はまだ捨てたものではないのだ」と考えを改めた。希望を見いだせた。
- ・多くの今はまだ無関心な人に、ぜひ聞いて欲しい。自分は変わったと思う。聞いたらみんなリサイクルしたくなるだろう。



2021年度 大学丸ごと研究室体験 『市立大学・市立高校 高大連携講座』



活動の概要	名古屋市立大学では、名古屋市教育委員会との高大連携事業の一環として、2015年度から「大学丸ごと研究室体験～市立大学・市立高校 高大連携講座～」を開講しています。 この講座は、夏季休業期間を利用し、本学医学研究科・薬学研究科・理学研究科の研究室において市立高校生のグループを受け入れ、各研究室の専門分野に関する大学水準の調査・研究などを体験してもらうものです。高校教員にも参加いただいています。
活動の時期	2021年7月～8月
関連URL	2021年度 講座一覧



医学講座の様子



薬学講座の様子



理学講座の様子

国費留学優先配置(特別枠)事業「環境健康安全学」プログラム



活動の概要	主に東南アジア諸国の①海外拠点校②大学間交流協定校から選抜された国費留学生に加え、本学の医学研究科、薬学研究科、理学研究科に入学した私費留学生と日本人学生が、「環境健康安全学」に関連した教育と研究を協働して行います。このプログラムでは、通常環境健康安全学に関連する講義科目の受講および研究に従事することに加えて、グローバルレベルでのSDGsに関連した課題について議論し解決策を提示するアクティブラーニングやSDGs関連機関でのインターンシップを行うなどの特色があります。
活動の時期	2020年度～2026年度
関連URL	MEXT scholarship 国際交流・留学 名古屋市立大学 (nagoya-cu.ac.jp)
期待される効果、今後の展望	このプログラムで学んだSGSに関連する知識や経験を元に、プログラム受講生は東南アジア地域等でのSDGs関連のリーダーになることが期待されています。また、このプログラムの履修を通じて培われた人脈は、グローバルレベルでのSDGs課題解決に役立つことも期待されています。
所属	医学研究科、薬学研究科、理学研究科
氏名	高橋智、上島通浩、安井孝周、頭金正博、肥田重明、熊澤慶伯、雨夜徹
専門分野	公衆衛生、環境科学、衛生化学、生態学



一期生アクティブラーニング発表会

高知県立牧野植物園の植物コレクションから新たなメカニズムの抗がん剤として期待される成分の発見



活動の概要	<p>【研究の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「小胞体ストレス応答（UPR）」の慢性的な活性化は、がんや糖尿病、神経変性疾患などの様々な疾患の発症や悪性化の原因となることから、UPRの制御異常を抑制する治療アプローチを開発しています。 世界的にも研究が進んでいないミャンマー産植物について、植物資源としての価値を開発しています。 <p>【研究の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 高知県立牧野植物園が保有するミャンマー産植物由来抽出液ライブラリーを用いてUPR抑制作用をスクリーニングしました。 スクリーニングの結果、植物由来成分ペリプロシンがUPRを抑制することを発見しました。 ペリプロシンのUPR抑制作用は強心配糖体に固有の構造に強く相関することを見出しました。
活動の時期	2021年5月（論文発表）
関連URL	2021年6月4日プレスリリース
researchmap URL	https://researchmap.jp/read0094185
関連する論文	<p>“Periplocin and cardiac glycosides suppress the unfolded protein response” Muneshige Tokugawa; Yasumichi Inoue; Kan'ichiro Ishiuchi; Chisane Kujirai; Michiyo Matsuno; Masaki Ri; Yuka Itoh; Chiharu Miyajima; Daisuke Morishita; Nobumichi Ohoka; Shinsuke Iida; Hajime Mizukami; Toshiaki Makino; Hidetoshi Hayashi Scientific Reports 11 9528 2021年 5月 [査読有り]</p>
期待される効果、今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> 本研究で明らかとなったペリプロシンのがんに対する作用のほか、糖尿病や神経変性疾患などに対しても新しい治療薬となる可能性が考えられ、更なる研究の発展が待たれます。 創薬研究をはじめとする更なるミャンマー産植物資源の活用が期待されます。
所属	薬学研究科
氏名	林 秀敏
専門分野	薬系衛生、生物化学、腫瘍生物学

Foxp3+ CD4+制御性T細胞は樹状細胞をコントロールして新興SARS-CoV-2抗原に対する抗原特異的免疫反応を誘導する



活動の概要	<p>【研究の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスSARS-CoV-2によるパンデミックは世界の人々の人命を脅かすだけでなく、経済や平和にも大きな打撃を与えています。SARS-CoV-2抗原に対する獲得免疫の誘導がどのようにコントロールされているかを明らかにすることは大変重要です。 ・私たちは、制御性T細胞の抑制を一時的に除くことで、外から投与されたSARS-CoV-2抗原のS1タンパクに対して獲得免疫系が誘導されるかをマウスモデルで検討しました。 <p>【研究の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・制御性T細胞を一時的に除いてS1タンパクを投与すると、アジュバントがなくても樹状細胞が成熟して抗原提示を行い、有効な獲得免疫が誘導されます。 ・産生された抗体は生きたSARS-CoV-2ウイルスの活性を中和する機能を持っていました。 ・既知の有効なアジュバントの一つであるpoly ICと同程度に獲得免疫を誘導できました。
活動の時期	2021年12月（論文発表, プレスリリース）
関連URL	プレスリリース
researchmap URL	https://researchmap.jp/8186
関連する論文	<p>“Foxp3+ CD4+ regulatory T cells control dendritic cells in inducing antigen-specific immunity to emerging SARS-CoV-2 antigens”</p> <p>Ryuta Uraki, Masaki Imai, Mutsumi Ito, Hiroaki Shime, Mizuyu Odanaka, Moe Okuda, Yoshihiro Kawaoka and *Sayuri Yamazaki (*Corresponding author)</p> <p>PLOS pathogens. 2021年12月 doi; 10.1371/journal.ppat.1010085. [査読有り]</p>
期待される効果、今後の展望	<p>獲得免疫の誘導には樹状細胞の成熟が必須です。この樹状細胞の成熟を導くにはアジュバントが必要であると考えられていました。今回の私たちの研究では、アジュバントが無くても、制御性T細胞の一過性の除去で獲得免疫が誘導できることがわかりました。これは、基礎免疫学の基本となる学術的知見といえます。また、新型コロナウイルスによるパンデミックの終焉のためには、獲得免疫の誘導法や増強法の開発の必要性が高まっています。本研究成果は新規獲得免疫誘導法および増強法として使えるかもしれません。既存のワクチンとの併用など、制御性T細胞を利用した新たな免疫誘導法の可能性があり、社会的にも意義が高いと考えられます。</p>
所属	医学研究科
氏名	山崎 小百合
専門分野	免疫学

都市政策研究センターが「ロボット・AI・IoT導入経営 人材育成講座」を開催



活動の概要	<p>2021年8月6日（金）から9月24日（金）までの間、名古屋市・名古屋工業大学との連携事業として、企業の経営者層を対象にロボット・AI・IoT導入経営人材育成講座（全8回）を開催しました。ロボット・AI・IoTに精通した本学の各研究科の教員9名により、AIの基礎となる機械学習や個人情報保護・情報倫理の重要性、ロボット基礎や産業応用事例の紹介、信号・画像処理分野におけるAIやIoTの導入事例など、ロボット・AI・IoT導入の計画や検討に必要な基礎・応用知識を学ぶ多彩な講義を開講しました。熱心な受講者からは質問が飛び交い、「有益な講義だった」「新鮮な知識を得られることが嬉しい」との声も聞かれ、好評を博しました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.42（2021年12月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年8月～9月
関連URL	本学広報誌『創新』Vol.42

中学生 プログラミング教室を開催



活動の概要	<p>2021年8月11日（水）・12日（木）に、名古屋少年少女発明クラブと本学との共催で中学生プログラミング教室を開催しました。理学研究科 渡邊裕司准教授が講師を務め、中学生48名がパソコンを操作しながら、プログラミング言語Python（パイソン）を用いたプログラミングの基礎から機械学習による手書き数字の認識までを学びました。感染対策に十分に配慮した上、オンラインではなく対面で開催したため、直接受講者の反応を見ながらアドバイスすることができました。中学生がプログラミングに熱心に励む様子もうかがえ、その姿に明るい未来を感じました。</p> <p>※本件は本学広報誌『『創新』 Vol.42（2021年12月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年8月
関連URL	本学広報誌『『創新』 Vol.42

「卓展2021」をオンライン開催



活動の概要	<p>卓展は、芸術工学部の学生たちが自ら作品展示会を主催することで、創作活動や学びを発信し、学内のクリエイティビティの向上を図ることを目的とした展示会です。</p> <p>例年、北千種キャンパスにて実物を展示していましたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、昨年度に引き続き2021年9月1日（水）～9月30日（木）までオンライン開催しました。</p> <p>建築からプロダクト、メディアデザインに至るまで、幅広いジャンルのデザイン卓が、ウェブ会場とバーチャル会場で作品を公開しました。また、教員からの作品評価も行われ、参加学生に単位も付与されました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.42（2021年12月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年9月
関連URL	本学広報誌『創新』Vol.42

栗原研究室が映画祭で受賞ラッシュ



活動の概要	<p>芸術工学研究科 栗原研究室の作品が、海外の映像祭で多数受賞しました。同研究室は映像作品の制作技術だけでなく、そこで表現される内容/社会的メッセージを大切にしております。車椅子生活の様子を描く作品やLGBTの問題、アダルトチルドレン症候群などさまざまなテーマに挑戦しており、今年度はSDGsをテーマにした作品も多く制作しています。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.42（2021年12月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年
関連URL	本学広報誌『創新』Vol.42

小鷹研究室、作間研究室が名古屋電腦博覧会に出展



活動の概要	<p>2021年8月26日（木）～9月5日（日）、市民ギャラリー矢田にて、県内の芸術系五大学の学生・卒業生によるデジタルメディア作品の展示会「名古屋電腦博覧会」が開催され、小鷹研究室、作間研究室が出展しました。</p> <p>芸術工学研究科修士課程1年の元橋洗佐さんは、体を少し傾けただけでも落下するような感覚に陥るVR装置、同博士課程1年 佐藤優太郎さんは、カニのイラストに手指を乗せて動かすとカニと一体化したような錯覚を覚える作品を展示しました。コロナ禍での開催でしたが、多くの来場者に実際に体験していただき、今後の実験に大いに役立つ意見をいただきました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.42（2021年12月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年8月～9月
関連URL	本学広報誌『創新』Vol.42

2021年度 名古屋市立大学高大連携授業



活動の時期	2021年度後期（9月～1月）
活動の概要	<p>名古屋市立大学では、高校生が本学学生と一緒に大学の通常の授業を履修できる「高大連携授業」を開講しています。</p> <p>「高大連携授業」は、意欲のある高校生に対し、多様な「学び」の機会を提供し、本学の教育研究に触れ、理解と関心を深めていただくことを目的としています。科目等履修生としてこの科目を受講し、試験に合格した場合、大学の単位を修得することができます。</p> <p>例年、全学部の大学1年生を対象とした教養教育のうち、2科目を開講しています。</p> <p>【2021年度開講科目】</p> <p>■バイオサイエンス入門：総合生命理学部 湯川泰教授、木村幸太郎教授、田上英明准教授</p> <p>■社会学C：人文社会学部 高橋康史講師</p>
関連URL	2021年度 開催報告



「バイオサイエンス入門」の様子



「社会学C」の様子

ナノテクノロジーと光を駆使した新しい技術のデザインと実用化



活動の概要	現代は、光を創成する時代から光を自由自在に操作する時代に変貌を遂げようとしております。ナノテクノロジーを駆使したメタマテリアル等に代表される人工光制御材料の出現は、今まで光を用いては不可能と思われて来た様々な技術、例えば"透明マント"及び"原子観察可能な光学顕微鏡"の実現を可能とする段階にまで来ており、人類の光に対する接し方に変革を迫っております。芸術工学研究科松本研究室では、光とナノテクノロジーを組み合わせることによって、従来は不可能と思われていた新技術の創出を目指して研究開発をおこなっております。具体的な研究テーマとしては、(1)短パルス可視光、深紫外LEDを用いた新しい殺菌技術の開発、(2)シリコン基板上に終端した水素原子の量子もつれ状態を利用した量子情報技術の研究、(3)0次元量子材料を用いた同位体濃縮技術の研究、等をおこなっており、これらのシーズ技術を産学連携によって実用化レベルにまで高めて参りたいと思っております。
活動の時期	2021年8月（プレスリリース）
関連URL	(1)https://doi.org/10.1038/s41598-020-74714-5 （殺菌関連） (2) https://doi.org/10.1038/s41598-021-01543-5 （殺菌関連） (3) https://doi.org/10.3390/w11020294 （殺菌関連） (4) https://doi.org/10.3390/w11050968 （殺菌関連） (5) https://doi.org/10.1103/PhysRevMaterials.1.051601 （量子情報関連） (6) https://doi.org/10.1103/PhysRevB.103.245401 （量子情報関連） (7) https://doi.org/10.1103/PhysRevMaterials.5.066003 （0次元量子材料）
researchmap URL	https://researchmap.jp/read1253163
関連する論文	<ul style="list-style-type: none"> ● Ichiro Tatsuno, Yuna Niimi, Hiroshi Terashima, Tadao Hasegawa, and Takahiro Matsumoto, "Mechanism of transient photothermal inactivation of bacteria using a wavelength-tunable nanosecond pulsed laser," Scientific Reports 11, 22310 (2021). ● Takahiro Matsumoto, Hidehiko Sugimoto, Takashi Ohhara, Akio Tokumitsu, Makoto Tomita, and Susumu Ikeda, "Quantum proton entanglement on a nanocrystalline silicon surface," Phys. Rev. B 103, 245401 (2021). ● Takahiro Matsumoto, Ikumi Nomata, Takashi Ohhara, and Yoshihiko Kanemitsu, "Determination of localized surface phonons in nanocrystalline silicon by inelastic neutron scattering spectroscopy and its application to deuterium isotope enrichment," Phys. Rev. Materials 5, 066003 (2021).
関連する特許	シリコン基板上に終端した水素原子の量子もつれ状態を利用した量子情報処理技術について特許出願中。
期待される効果、今後の展望	今後は研究室所有の技術ならびに情報を出発点として、各企業において展開可能な新しい応用について具体的にアイデアを出し合い、共同で特許出願を図るようなイメージで仕事を進めていきたいと考えております。ナノ材料と光技術を組み合わせることによって、将来の社会に必要な多くの技術を創出することができます。まずは、日常の技術的問題についても気兼ねなく相談して頂ければと思っています。
所属	芸術工学研究科 産業イノベーションデザイン領域
氏名	松本貴裕
専門分野	ナノ材料工学、光工学・光量子科学、熱工学

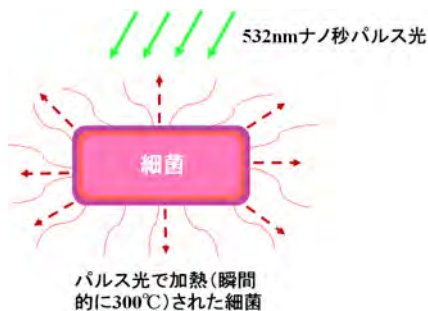


図1：可視光を用いた新しい殺菌技術の効果を示す写真(大腸菌)。

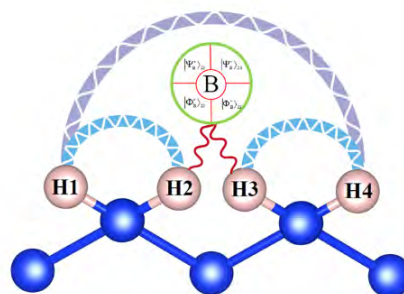


図2：Si基板上に終端した水素の量子もつれ状態を利用した量子フロッピング原理。

尿路結石患者の国内データ・バイオバンク設立研究(多施設共同前向き研究)



活動の概要	本研究は、尿路結石症患者の臨床情報と検体試料を集め、保存するための前向き登録研究です。本研究の目的は、臨床情報のみならず結石・腎組織・尿・血液から得られる情報において、尿路結石の形成につながる病態を明らかにすることです。さらに、データ集積管理システム(Research Electronic Data Capture: REDCap)への臨床情報の蓄積より、生体試料の解析結果と臨床アウトカムの関係を明らかにし、オーダーメイドの薬物治療を開発することができます。
活動の時期	2019年：8月 2021年：8月・12月
関連URL	https://www.nagoya-cu.ac.jp/media/20190912_seeds_taguchi.pdf
researchmap URL	https://researchmap.jp/kazumi.taguchi
関連する論文	<ul style="list-style-type: none"> • Taguchi K, et al. Genome-wide gene expression profiling of Randall's plaques in calcium oxalate stone formers. J Am Soc Nephrol 28:333-47.2017 • Tzou DT, Taguchi K, et al. Computed Tomography Radiation Exposure Among Referred Kidney Stone Patients: Results from the Registry for Stones of the Kidney and Ureter. J Endourol. 33: 619-624, 2019 • Taguchi K, et al. Ureterscopy-assisted puncture for ultrasonography-guided renal access significantly improves overall treatment outcomes in endoscopic combined intrarenal surgery. Int J Urol. 28:913-919, 2021.
期待される効果、今後の展望	尿路結石症は10人に一人が罹患し、世界3大疼痛としても知られる疾患です。有用な薬物治療が確立されておらず、社会的なニーズからこのような世界初の大規模データ・バイオバンクの設立に向けて従事してまいります。今後の展望として、多施設にて尿路結石症患者の登録を行います。臨床情報の解析及び生体試料情報との関連解析から、バイオマーカーの検索、病態責任遺伝子の同定を行い、個別の最適治療の確立を目指します。
所属	医学研究科 腎・泌尿器学分野
氏名	田口 和己
専門分野	尿路結石症・腎疾患・内分泌代謝疾患

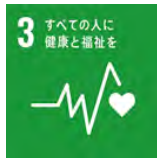
CRYSTAL-J 研究

Clinical Registry of STones for Analyzing Lithogenesis in Japan

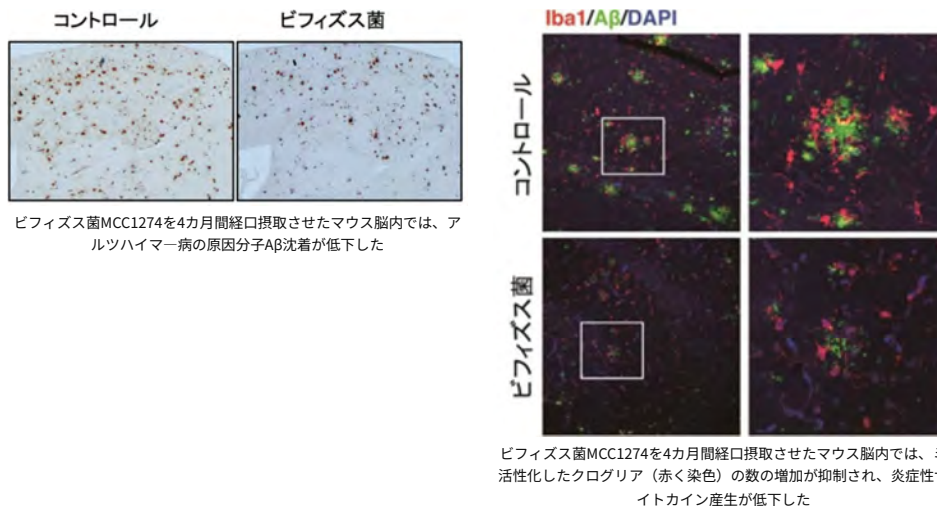


名古屋市立大学を含む国内6大学が基幹施設となっています。

天然食品成分ならびにプロバイオティクスなどの経口投与によるアルツハイマー病の発症ならびに病態進行の予防



活動の概要	アルツハイマー病の発症機構は解明されつつあり、分子病態の進行カスケードが明らかになりつつあります。このカスケードの鍵となる現象として、Aβの産生、分解・除去、tauのリン酸化、炎症等があげられます。このカスケードに食品由来成分やプロバイオティクスなどが病態進行を抑制的に関与することがわかれば、予防・治療法開発につながると考えられます。私たちの研究室では、培養神経細胞あるいは細胞株ならびにモデルマウスを使用して、各成分あるいはビフィズス菌などを添加または投与し、鍵分子であるAβ産生、Aβ分解・除去に働くapoE-HDL産生、tauのリン酸化、ならびに炎症に対する影響を検討する研究に取り組んでいます。すでに複数の会社との共同研究により、特許出願も複数に及びます。また、臨床研究についても進行中です。
活動の時期	・論文発表：2021年12月 ・プレスリリース：2022年1月
関連URL	http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/1seika.dir/biochem1home.html
researchmap URL	https://researchmap.jp/makotomichikawa
関連する論文	Abdelhamid M, Zhou C., Ohno K., Kuhara T, Taslima F, Abdullah M, Jung C-G, Michikawa M. Probiotic Bifidobacterium breve decreases Aβ production via the upregulation of ADAM10 level and attenuates microglia activation I APP knock-in mouse model of Alzheimer's disease. J Alzheimers Dis, in press Abdelhamid, M., Jung, C. G., Zhou, C., Abdullah, M., Nakano, M., Wakabayashi, H., Abe, F., Michikawa M. Dietary lactoferrin supplementation prevents memory impairment and reduces amyloid-β generation in J20 mice J Alzheimers Dis, 74: 245-259, 2020. doi:10.3233/JAD-191181
期待される効果、今後の展望	●薬剤開発に比べて、食品成分やビフィズス菌投与は毒性がない、または低く、実用化への障害は少ない。 ●発症後にしか使用できない治療薬に比べて、予防的に摂取することが可能である点に強みがある。 ●動物で効果のあった成分については、ヒトでの臨床試験を検討する。現在臨床試験が進行中のものもある。
所属	医学研究科 神経生化学
氏名	道川 誠
専門分野	アルツハイマー病分子病態解明



「脳のはたらき」を推定する技術の開発



活動の概要	さまざまな技術的な発展により、ヒトや実験動物の行動や脳活動のデータを精度良く測定することが可能になってきています。しかし、測定された行動や脳活動のデータから「脳のはたらき」を適切に推定する技術はほとんど存在していません。私たちは、これまでの基礎生命科学研究で培った経験を元にして、脳のはたらきを適切に理解するための人工知能技術などの開発を行っています。
活動の時期	2019年6月（論文発表） 2020年10月（論文発表） 2021年3月（論文発表） 2021年9月（論文発表）
関連URL	研究室WEBサイト 動物行動の人工知能解析に関する異分野融合研究に関して；2021年8月17日公開 Wen et al., eLife 2021に関して；2021年6月30日掲載 動物行動の人工知能解析に関する異分野融合研究に関して；2021年12月24日に公開
researchmap URL	https://researchmap.jp/kokimura/
関連する論文	Maekawa T, Kimura KD. (他16名) (2020) Nat Commun, 11: 5316. Wen C, Kimura KD. (他12名) (2021) eLife, 10: e59187. Maekawa T, Kimura KD. (他6名) (2021) Nat Commun, 12: 5519.
期待される効果、今後の展望	私たちの研究室の主な研究対象は「線虫」ですが、シンプルで解析が容易な線虫を研究して技術開発を行えば、それが高等動物やヒトの生命機能の理解につながる事が分かってきました。行動や脳活動の測定データから得られた知識と、脳機能障害や薬理効果に関する基礎生物学的な知見を独自の方法で組み合わせることで「脳のはたらき」が理解できるようになると考えています。このように、他の研究者の方々とは全く違った角度から、社会に貢献していく所存です。
所属	理学研究科 生命情報系
氏名	木村 幸太郎
専門分野	神経科学、分子遺伝学、光生理学（イメージング）

KOUGEI-EXPOに出展！～芸術工学部学生がデザインした「尾張仏具の新しい祈りのカタチ」～



活動の概要	<p>住環境の変化や「宗教離れ」の影響により、仏壇仏具の売上は年々減少してきています。しかし、故人を想う気持ちは、時代が変わっても失われるわけではありません。そのような背景から、若者の感性で「新しい祈りのカタチ」をデザインする試みが、尾張仏具技術保存会と芸術工学部影山友章研究室との連携により実施されました。約1年の開発期間を経て、産業イノベーションデザイン学科3年の磯田彩穂李さん、黒田和花さん、幸田悠さんがデザインした3つの仏具が、第38回伝統的工芸品月間国民会議全国大会（KOUGEI-EXPO）に出展されました。</p> <p>※本件は本学広報誌『創新』Vol.43（2022年3月発行）に掲載されました。</p>
活動の時期	2021年11月
関連URL	本学広報誌『創新』Vol.43